

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヤリイカ

学名 *Heterololigo bleekeri*

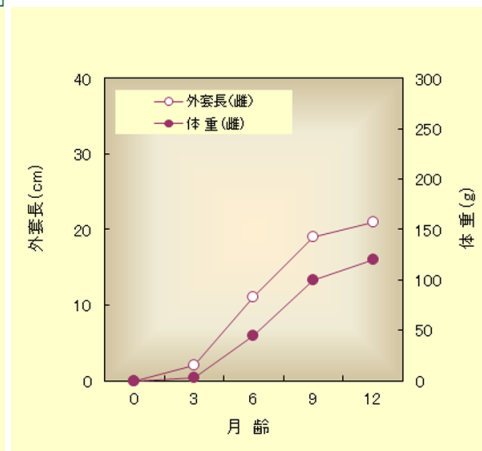
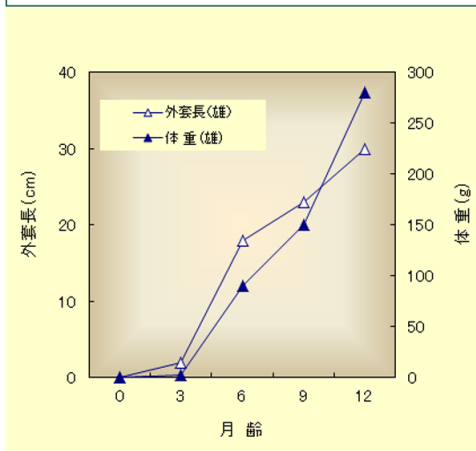
系群名 対馬暖流系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 1歳
成熟開始年齢： 1歳
産卵期・産卵場： 本州日本海側で1～5月(2～3月中心)、北海道海域で5～7月、山口県から北海道宗谷地方の沿岸の岩礁域、陸棚上の沖の瀬など
索餌期・索餌場： 夏～秋季、主に100～200mの水深帯の陸棚上
食性： 魚類、イカ類、端脚類、オキアミ、浮遊性甲殻類など
捕食者： 不明

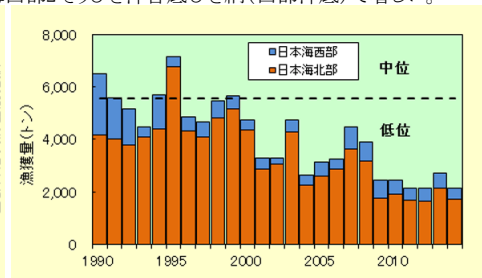
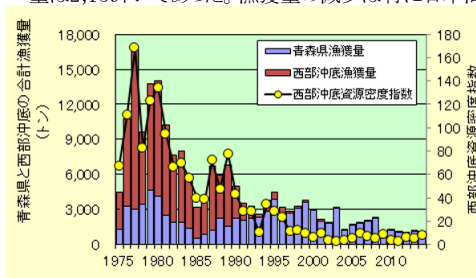


漁業の特徴

陸棚の発達する日本海西部海域(山口県～福井県)では沿岸から沖合にかけて広範囲に分布し、各種底びき網漁業、いか釣り漁業、定置網漁業で漁獲される。日本海北部海域(石川県～北海道)では主に定置網で漁獲され、その他底びき網でも漁獲される。両海域とも盛漁期は10～3月で産卵群を中心に漁業が行われる。

漁獲の動向

本系群の漁獲量は、1970年代は年間1万トンを超える年もあったが、1990年以降は減少傾向にあり、2014年の漁獲量は2,159トンであった。漁獲量の減少は特に日本海西部2そうびき沖合底びき網(西部沖底)で著しい。



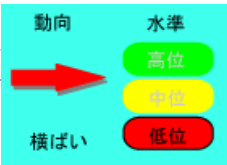
資源評価法

本系群は、系群全体の資源量または資源量指標値が得られないことから、漁獲量を資源量の指標値として資源状態を判断した。

資源状態

資源水準は、対馬暖流系群の漁獲量の大半を占め、漁獲量の多かった1970年代の値が含まれている青森県と西部沖底の合計漁獲量の最大値(16,683トン)を三等分し、上から高位、中位、低位とした。2014年の漁獲量は2,159トンであり、中位と低位水準の境界値である5,561トンを下回ったことから、低位と判断した。また、直近5年間(2010～2014年)の漁獲量の推移から、動向は横ばいと判断した。なお、日本海西部海域のヤリイカを対象とした主漁業である西部沖底の資源密度指数も漁獲量同様、1970年代後半は高い値であったが、その後は減少し、2000年以降は低

い値に留まっている。



管理方策

本系群の資源状況および分布域は海洋環境の影響を強く受け、特に日本海西部海域の資源量の減少には海洋環境の変化(水温の上昇)が関連していることが指摘されている。そのため、適切な資源管理の下、環境が好転するまで親魚量を確保することが重要である。そこで資源量指標値の水準および変動傾向に合わせた漁獲を行うことを管理目標として2016年ABCを算出した。なお、1990年以降の高水温による応答が日本海西部海域と日本海北部海域で異なることから、海域毎に資源管理を検討することも重要である。

管理基準	Limit/Target	F 値	漁獲割合 (%)	2016年ABC (百トン)
0.7・Cave 3-yr・1.00	Limit	-	-	16
	Target	-	-	13

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量
- Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大が期待される漁獲量
- ABC算定規則2-2)により、 $ABC_{limit} = \delta_2 \cdot Ct \cdot \gamma_2$ 、 $ABC_{target} = \alpha ABC_{limit}$ とし、係数 α には標準値0.8を用いた
- δ_2 には0.7(低位水準でCtに3年平均を用いる場合の推奨値)を用いた
- γ_2 (1.00)は、 $\gamma_2 = 1 + k(b/I)$ で計算した。Kは標準値の0.5とし、bとIは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2012～2014年))である
- Cave 3-yrは過去3年間(2012～2014年)の平均漁獲量
- ABCは100トン未満を四捨五入

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は横ばい
- 西部沖底の資源密度指数も低い水準である

管理方策のまとめ

- 資源量指標値の水準および変動傾向に合わせた漁獲を行うことを管理目標としてABCを算定
- 適切な資源管理の下、環境が好転するまで親魚量を確保することが重要
- 海域(西部海域と北部海域)別に資源管理を検討することも重要

執筆者: 木所 英昭

資源評価は毎年更新されます。